

秋建時報

秋建時報

平成23年2月1日(第1202号)



発行／(社)秋田県建設業協会
秋田市山王四丁目3番10号
TEL 018(823)5495
FAX 018(865)2306

<http://www.a-kenkyo.or.jp>



「なまはげ」 絵／文：白澤 恵舟

人々も、暫し野性を取りもどし、心に体に熱い火をたぎらす。
今年も「なまはげ」の咆哮が男鹿の山野に響き渡る。

風の王国

会長 菅原 三朗

本県では急速に進む少子高齢化、人口減少、地域コミュニティ維持の課題などを解決し、安全・安心に暮らせる豊かな社会を築くためには、課題の根源にある産業不振と雇用の受皿不足への対応が必要であり、新たなリーディング産業の創出が望まれている。

今、新成長戦略においてグリーンイノベーションが掲げられ、新エネルギーがその中核であるがこの巨大な市場を、本県がどう捉え活用していくか「秋田県新エネルギー産業戦略」を策定中である。

新エネルギー産業と言ってもその範囲は、新エネルギー機器、部品、部材等の製造から新エネルギー等の供給事業及びメンテナンスなど広範多岐に亘る。建設産業が関わりを持つのは主に風力、地熱、太陽光、中小水力等の発電・電力供給事業における建設やメンテナンスなどである。

地球温暖化問題及びエネルギー安全保障への対応などからも、再生可能(新)エネルギー産業は経済成長の牽引役として注目されており、2012年度には国の導入目標を達成するため太陽光、風力、中小水力、地熱、バイオマス等の発電による全発電量の全量買取制度「FIT」の導入が計画されており、再生可能エネルギーの導入が加速されるものと期待されている。

このような時代背景の中で本県の持っている再生可能エネルギー(風力)の高いポテンシャルを活用し「風の王国」プロジェクトと言う政策提案がある。この構想を進めているのは「NPO環境あきた県民フォーラム」理事長の山本久博氏である。

概要は投資額5千億円規模で秋田県の沿岸と大潟村に最大出力約240万KW(大型原発2.4基相当)数にして1,000基の風力発電基地を造る。この事業を支える風車の生産工場を誘致し、県内雇用の創出と国内風力発電産業の振興に寄与するという。

本県は国内で最高水準と言われる風況(実稼動20～26%を達成)であり、又低周波や騒音による健康被害を防止出来る砂防林が民家との緩衝地帯を形成している。世界的に風車産業の需要が拡大しており最も成長している産業であるが日本は立ち後れている。しかし秋田県に大型需要が見込められれば進出可能な企業(重工業)もあると言う。

何よりも東京都が北東北のグリーン電力購入を計画中であり、本格導入予定の2020年迄に400万KW規模の目標である。「風の王国」完成時には約240万KWの規模となる。最新の風車は大型化が主流で海岸線もしくは洋上が中心となる。2,400KW級の風車は高度120mの風を捉え大潟村も有望地域である。

バードストライクなどの環境問題や、景観の問題もあるが将来の県民のために有望な産業を興し、大きな雇用を創出する大義があり理解が得られるものと思われる。

今後は東北全体が再生可能エネルギーを作

りそれを都市へ送ることが急務であり、国のレベルでこの問題が検討されるはずである。スマートグリッドなどの送電網等の強化が必要であり電力会社が大規模には受け入れ不可能と言われるが、日本の電力会社の技術力で不可能なことではないはずであり東北電力・東京電力・東京都で調整可能なことと考える。「風の王国」は全国で最も早く着手したプロジェクトだが、世界の風力発電事業の成功例を見ると、地元住民参加型の事業がベストであり県民の理解が成功の鍵となる。以上が「風の王国」プロジェクトの構想の概要である。

これとは別に大潟村ではすでに、秋田大学や県内の新エネルギー関連企業が技術と製品を持ち、「地域直流グリッド」の実証事業も行われており、又東京都の支援による「風力発電シンポジウム」等も開催されるなど地域の理解が進みつつある。

建設産業としても国の公共事業が年々減少する中で新たな公共とも言うべき「風の王国」プロジェクトのような事業が「PFI」や「PPP」などで事業化が進む場合は是非参加をしていくべきだと思っており、今後県の「新エネルギー産業戦略」の中で行政も積極的に推進をしていくべきであると思っています。

又建設産業が実際に、供給事業建設の施工やメンテナンスに関わっていく場合でも、専門知識の習得や能力の開発が必要であり、そのための行政からの支援や関係機関からの情報提供などとともに専門家による研修会の開催など、積極的な取り組みをしていかなければならない時代であると思います。

平成22年度 第3回理事会



県協会は12月7日、秋田ビューホテルにて平成22年度第3回理事会を開催した。

会議では、「建設業の社会貢献活動の推進とイメージアップ活動」の一環として、各支部の特色を生かしたPR用パネルを作成し、活用を図ることとしたほか、現在、紙面配付と電子版の併用発行している本会会報「秋建時報」について、平成23年4月1日より、電子版のみの送配信とすることを決定した。

議題は次のとおり

●報告事項

- 1) 中間事業報告について
- 2) 公益法人制度改革検討委員会の結果について
- 3) 常置委員会の開催結果について

●協議事項

- 1) PR用パネル(地域を支える建設業)について
- 2) 「秋建時報」の電子化について
- 3) 秋田県建設業暴力団追放対策協議会規約変更(案)について
- 4) 平成23年秋の叙勲候補者について

支部だより

安全祈願祭を斎行

平成23年1月に鹿角、北秋田、山本、秋田の4支部において安全祈願祭が斎行され、各支部会員・関係者が出席し、今年一年の安全を祈願した。

鹿角支部 (村木通良支部長)

1月13日

於・鹿角パークホテル、会員・関係者41名出席。



北秋田支部 (北林一成支部長)

1月18日

於・ホテル松鶴、会員・関係者43名出席。



山本支部 (大森三四郎支部長)

1月19日

於・能代市 日吉神社、会員・関係者35名出席。

併せて同日、祈願祭終了後に能代キャッスルホテル平安閣へ会場を移し、吉永宙司・能代河川国道事務所長、加賀屋建一・秋田県山本地域振興局長の両名を講師に招き、新春講演会を開催。



秋田支部 (加藤憲成支部長)

1月27日

於・シャインプラザ平安閣秋田、会員・関係者52名出席。

祈願祭終了後、仙北市角館町出身の俳優・山谷初男氏を講師に「はっぼん よもやまばなし」と題し新春講演会を開催。



平成22年度 通常総会を開催

平成22年12月1日、秋田県公共工事品質確保・安全施工協議会(菅原三朗会長)は平成22年度通常総会を秋田ビューホテルにて開催し、会員58名が出席した。

総会の冒頭に菅原会長が登壇し、平成21年の政権交代以降の国の公共事業予算の急激な削減、地域間格差の拡大など、建設業が危機的な経営環境に直面している現状における建設業の役割について「日常的に地域の人々の安全・安心な暮らしを守り、地域経済を支え、雇用を確保するなど、その使命は変わることはない」と述べ、また、「地域の実情を熟知しているからこそ出来る活動を積極的に行うことが何よりも大切であると感じている」と挨拶した。

また、来賓として柴田久・秋田河川国道事務所長をはじめ県内各事務所長、加藤修平・秋田県建設交通部長、舩屋成一・東日本建設業保証(株)秋田支店長が出席した。

議事では、21年度事業報告・決算、22年度計画・予算について審議。議案どおりに承認された。併せて、この度の新会員として(株)板橋組(板橋広光社長・男鹿市弘戸)の入会が承認され、紹介が行われた。

議事終了後、宮田忠明・東北地方整備局企画部技術調整管理官が「最近の建設業をとりまく状況について」と題して講演。国内・東北の経済動向、受発注者間のコミュニケーション実態、社会資本の維持・更新など各種のテーマについて事例・取組を紹介した。



(財)建設業福祉共済団から

建退共秋田県支部から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋田水風景

文と写真/加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴/旅の手帖、WoodyLife、ペンチャー・リンク、郷、ある他
海外取材歴/ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写真主宰/写真教室、撮影ツアー企画等

Vol.20

船越水道

【ふなこしすいどう】

男鹿市・潟上市



男鹿半島の付け根に位置し八郎潟残存湖と日本海を結ぶ全長約2kmの船越水道には、4つの構造物が直交している。河口側から、国道の男鹿大橋、JR男鹿線の鉄橋、旧道の八竜橋、そして防潮水門である。

3本の橋が水道をまたいで越えていくためのものであるのに対して、防潮水門は、この船越水道の役割に大きく関わっている、ある意味、水道と「一心同体」の存在である。

干拓前の八郎潟は、周辺の河川から流入する淡水と、潮の満ち干で船越水道から逆流する海水が混じり合う汽水湖だった。しかし、干拓によって八郎潟の中に島状に穀倉地が誕生し、周辺にある水かんがい用水に使用となると、汽水のままではまずい。純然たる淡水でなければならない。そのために、船越水道からの海水の「行き来をせき止め、八郎潟残存湖を真水化する」というたいへん重要な責務を、防潮水門は担うことになったのだ。もっと具体的に言うと、水門を閉じること

で海面よりも残存湖内の水面を常時高く維持し、規定値以上に残存湖内の水位が上がった場合は真水が水門を越えて海に流れるようになっており、雪解け水や大雨などで急激に残存湖内の水位が上昇した場合は、水門を開けて一気に真水を海に流すようになっている。

ここで一つ、気になることがある。これから先、地球温暖化が急激に進んで海面が想定外に上昇することがあると、逆に海水が水門を越えて残存湖内に流入してしまう事態も起こりうるのではないかと。考え過ぎと笑われるかもしれないが、既に南太平洋の島国では実際に海面上昇で国土の一部の水没が危惧されているところもある。それだけでなく大潟村の土地の大半は海面よりも低い位置にあり、海面上昇などは決してあってはならないことなのだ。

地球環境の悪化が収まり、平和な水辺の風景がいつまでも続くことを祈るのみである。

「うちの奥さん」考

永井登志樹

毎年今ごろの2月から3月にかけての時期は、年度末に集中する提出原稿の締め切りでアップアップなり、精神的に追いつめられるのが恒例で、今年もそんな状況に陥りそうな状況である。時間的に余裕があるうちに仕事を片付けていけばいいだけの話なのだが、それがなかなかできない。「明日できることは今日やらない」という自分の怠け者体質というか、逃避体質というか、キリギリス体質というか…楽な方へ楽な方へと走ってしまう性向は若い時からのもので、歳をとっても少しも改善されることなく今に至っている。

つい最近、村上春樹氏のエッセー『走ることにについて語るときに僕の語ること』を読んで、氏のたゆむことのない自己管理と日々の鍛錬に、自分の軟弱さを恥じたのだけど、だからといって今日から自己改造に取り組むぞ！なんて思わないところが、またキリギリス体質たる所以で…。

それにしても、村上氏の著書を読んでいつも思うのだが、氏の自己管理能力、持続力、辛抱強さの源はどこにあるのだろう。私は血液型・星座の性格鑑定(分析)というのを信じているクチで、一時相性(恋愛)占いにも凝ったことがあった(『秋建時報』の読者はそんな占いなど信じない方が大部分と思われるが)。村上氏は山羊座のA型というから、その知識から判断すると、頑固で芯が強く、不器用だけど誠実なタイプということになる。中身よりも外見(そとみ)を重視する快樂主義の天秤座B型(＝私である)とはえらい違いなのである。

ところで、村上氏の奥様は意外や私と同じ天秤座B型らしい。この組み合わせは行動パターンや価値観が全く違うので、相性が最悪なはず。ただし、人は自分にないものに惹かれるというから、相性が悪いからといって恋愛対象としてふさわしくないとか、結婚がうまくいかないとかは、必ずしもいえないのが男女の関係で面白いところ。

ただ、ひとつだけ村上氏のエッセーを読んで前から気になっていたことがある。それは、奥様を「うちの奥さん」と書いていること。『走ることにについて語るときに僕の語ること』にもひんぱんに出てくる「うちの奥さん」という言い方は、いつのころからか一般化しているようで、インターネットのGoogleで検索したらなんと394,000件もヒットした。でも、この言い方は(正しい)日本語としては間違っているのではないだろうか。

辞書には次のように書いてある。

・おくさん 【奥さん】

他人の妻を敬っていう語。「一によりしく」

「おくさま」より少しくだけた言い方。現在は広く一般に用いられる。

・おくさま 【奥様】

他人の妻を敬っていう語。もと、公家(くげ)・大名などの正妻をいったが、のち一般の武家・商家でもいうようになり、現在は、広く一般に用いられる。

(以上「大辞林」)

つまり、「奥さん」は他人の妻に対する敬称だということになる。それでは、【妻】はというと、

・結婚した男女のうち、女性のほう。

※古くは「つま」に「夫」の字をあて、配偶者の男女どちらをもさした。

(「明解国語辞典」)

日本語には女性の配偶者としての「妻」と同じ意味で使われることがたくさんあって、インターネットのYahoo!辞書の類語辞典で調べたら、以下のように出てきた。

・連れ合い 夫人 婦君 細君 主婦 女房 嬢 (かかあ)

内儀 (おかみ) ワイフ

・(相手方の) 奥様 奥方様

・(自分側の) 妻 (つま・さい) 家内 愚妻 老妻 小妻

ここにあげたほかによく使うのは「(うちの)かみさん」だろう。子どもができてからは「かあさん」と呼ぶようになる人も多い。「山の神」なんていうものもある。あとよく耳にするのが「うちの嫁、嫁はん」という言い方。TVで関西の芸能人が喋っているのが伝染したのか、最近は関西出身以外の人でも使ったりしている。本来は息子の親の立場から息子の配偶者を指すことばのはずなので、これにも違和感を覚える。

ただ、「うちの奥さん」や「うちの嫁はん」という言い方が一般的になっていくのも、わかるような気がする。みんな自分の妻が好きで愛しくて、そしてちょっぴり怖いのだ。その気持ちを表すには、「妻」じゃ堅苦しすぎてそっけない。「女房」はちょっと古くさいし、「細君」はなんとなくきざったらしい。今どき「ワイフ」や「ベターハーフ」の横文字もどうかと思う。「家内」は家の中という意味だから、差別語ととられかねない？

考えてみると、日本語には自分の配偶者を指す語はたくさんあるが、英語の「honey」「darling」のような夫婦間の親密さを表すことばはほとんどない。かつて松任谷(荒井)由実が『ルージュの伝言』という曲で歌っていたような「マイダーリン」「マイハニー」と呼び合う夫婦は、この日本では稀少だろう。「うちの奥さん」のことばの中には、英語の「my honey」の意味合いが含まれているのではないだろうか。

「うちの奥さん」は日本語の用法としては間違っているのだけれど、村上春樹氏のことだから、それを承知のうえでわざと使っているのかもしれない。村上氏の一番(最初)の読者であり、おまけにマネージャーでもある奥さんへの敬愛の現れ、もしくは愛情深さのアピールとして…。ということは、案外、恐妻家なのか！？

ちなみに私は妻のことを対内的(身内や親しい友人)には「名前にさん付け」で呼んでいる。対外的には「妻」がほとんど、たまに「連れ(合い)」も使う。時々「うちの奥さん」と言いそうになるが、意識して使わないようにしている。妻のほうは私のことを対内的には「苗字に君付け」で呼んでいる(ようだ)。職場では「旦那」とも言っているらしい。対外的にはよくわからない(たぶん夫か)。一度だけ私の友人に「主人」ということばを使ったことを知っているが、もの凄く違和感があった。たぶん、そのことばにふさわしい行いを全くしていないからだろう。